

7月22日 ルカによる福音書7章11～17節

【解説と黙想】

やもめの息子の復活

これは、主イエスのことばによって起こった奇跡の物語です。「死人が生き返る」というのは、主イエスの数多い奇跡の中でも、とくに驚くべき御業です。主イエスが死人を生き返らせたという御業は、他にも聖書にベタニアのラザロ（ヨハネ11：1～44）と、会堂長ヤイロの娘（マタイ9：18～26、マルコ5：21～43、ルカ8：40～56）の記事があります。これらの物語は、永遠の生命への復活ではなく、再び死ぬべき命への生き返りに過ぎません。しかし、これらの奇跡は、人間の死の問題に対して与えてくださる恵みと希望を指し示す「しるし」です。

主イエスは、死者に対して「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と呼びかけられました（14節）。ヤイロの娘に対しても、ラザロに対しても、主イエスは呼びかけられました。主イエスは死者にも呼びかけることのできる救い主です。主イエスこそ、死にゆく者への大きな慰めです。

人は、親しい者が死ぬとき、遺体にすがりついて泣きながら叫びかけます。けれども、それは空しい呼びかけです。死を境として、その親しい者は呼びかけることのできない世界に移ってしまったからです。

救い主イエスは、死者に対しても呼びかけられるお方です。死に際においても、死後においても、私たちとの人格的な交わりを保つことのできるお方なのです。詩編23編4節には、「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」とあります。神を信じる者は、死の陰の谷を行くときも孤独ではないのです。死ぬ前も、死のときも、死の後も、救い主イエスが私たちと共にいてくださるからです。なんとという恵みでしょう。

死のもう一つの問題は、遺族の絶望と悲しみです。その母親はやもめでした。それだけでも可哀想です。それに追い打ちをかけるように、一人息子が死んでしまいました

た。これは本当に最悪の状態です。残されたこの母には、自分の生活の支えを失って悲しみのどん底に落とされたことでしょう。そこで主イエスは、この母親を憐れに思い、頼まれてもいないのに息子を生き返らせられました。この「憐れに思う」とは「内臓」を意味する言葉で、はらわたの揺れ動くような深い感情を意味します。

当時流行していたストア哲学は、神とは最高の存在で自らは動くことなく他を動かす、自らは影響を受けず他に影響する「不動の動者」であるとしました。神は、他からの影響を受けるようなちっぽけな方ではないということです。ところが、神の子であり「主」（13節）である方は、たった一人の人間の死に、はらわたの揺れ動くような感情を覚えられたということです。主イエスは偉大な神です。それでも、一人ひとりの悲しみに深い同情を寄せられるお方なのです。私たちが深い悲しみの中にあるとき、主イエスは人の心を探り知るお方として、私たちの悲しみを正確に知ってくださり、いつも深い同情を寄せてくださいます。私の悲しみを知っている方がおられることを、私たちは悲しみを経験するたびに覚えたいと思います。

主イエスは、深い同情だけでなく、この若者を生き返らせて母親にお返しになりました。これによって主イエスは、死を境として断ち切られた母と子の絆を再び結び合わせられたのでした。死人を生き返らせる奇跡を誰もが期待すべきではありませんが、主イエスにあってやがて天で愛する者と再会することは、皆が期待して良いことです。天国は、主イエスを中心として、主の御顔を仰ぐ所ですが、また、愛する者との再会の場でもあるのです。御国にあって、私たちは神との理想的な愛の関係を喜ぶと同時に、人との理想的な愛の関係を喜ぶことができるのです。（小澤寿輔）

《参照箇所》 詩編23編4節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問25

7月22日 ルカによる福音書7章11～17節

【説教展開例】

やもめの息子の復活

◇..... 単元のねらい◇

死人を生き返らせるキリストの物語を通して、キリストが死の問題に解決を与えて下さる救い主であること、そして、同情心に篤いお方であることを学ぶ。キリストの人を生かす力は、私たちがこの世に生きている間だけでなく死後にも及ぶ。これは神の国の支配を信じる者にとって大きな喜びである。そのことを知らせ、主を喜ぶ子どもとならしめたい。

「死人を生き返らせるイエスさま」

皆さんは、何か生き物を飼ったことがあるでしょうか。おうちで犬を飼っている、猫を飼っているというお友だちがいるかもしれません。また、魚を飼っているお友だち、夏なので虫を飼っているというお友だちもいるかもしれません。生き物を飼っているお友だちも、飼っていないお友だちも知っていると思うのだけど、生き物は、いつかは死んでしまいます。いつまでも一緒にいたいと願っても、いつか必ずお別れのときが来ます。生きているときには、寝たり起きたり食べたり遊んだりするし、呼びかければ答えてくれる生き物もいますね。でも、死んでしまったらどうでしょう。もう動かなくなつて、声をかけても目を覚ましてくれません。

これは人間も同じです。人間は、死んでしまったら、死を境にして、お話することも、何かを一緒にすることもできない別の世界に行ってしまいます。そうすると、とても悲しいし、寂しくなります。でもイエスさまは、死という問題を解決してくださるお方なのです。そのことを、今日のお話から一緒に学びたいと思います。

イエスさまはお弟子さんたちと一緒にナインという町に行かれました。その町の門に近づくと、ちょうどあるお母さんの一人息子が死んで、その息子を入れた箱（棺という）が運び出される場所でした。その母さんはやもめでした。やもめとは、夫が先に死んでしまった人のことです。だから、そのお母さんは、自分の夫はもう死んでしまつて、もうそれだけでも可哀想なのに、その上、自分の一人息子が死んでしまった

のです。一人息子なので、このお母さんには、もう他に子どもはいません。これは本当に最悪の状態です。このお母さんは、家族で一人だけ残されて悲しみのどん底に落とされたはずです。町の大勢の人がこのお母さんのそばに付き添っていました。でも、どんなに大勢の人が一緒にいてくれたとしても、死の悲しみを解決する力は人間にはありません。

それを見ておられたイエスさまは、そのお母さんをとつても可哀そうに思い、「もう泣かなくともよい」と言われました。そして、近づいて棺に手を触れて、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われました。すると、その死んでいた若者は起き上がったものを言い始めたのでした。一度死んだ人を生き返らせるなんて、神さまにしかできないことです。そのことが起こったので、人々はみな驚いて神さまを賛美したのでした。

ここまでの、今日のお話のただけでも、これらの出来事を通して、神さまは何をぼくたち私たちに教えようとしておられるのでしょうか。三つの大切なことがあります。

一つ目は、イエスさまは死の問題を解決してくださるお方であるということです。ぼくたち私たちは、イエスさまが病人を癒されたとか、悪霊に取りつかれている人を助けたとか、そういう奇跡を行われたというお話を、これまでに何度も聞きましたね。でも「死人が生き返る」というのは、とくに驚くべき奇跡です。イエスさまが死人を生き返らせたという奇跡は、他にもペタニアのラザロを生き返らせるという奇跡と、

会堂長ヤイロの娘を生き返らせるという奇跡が聖書にあります。この二つの奇跡もそうなのですが、イエスさまは「起きなさい」とか「墓から出てきなさい」と、死んだ人に呼びかけて生き返らせるのですね。このように、イエスさまは死んでしまった人にも呼びかけることのできる救い主なのです。

人は、死人にいくら話しかけても、その死人が目を覚ますことはありません。なぜなら、死人はこの世から死を境に別の世界、呼びかけることのできない世界に移ってしまったからです。けれども、イエスさまだけは、死んだ人に対しても呼びかけることのできるお方なのです。人が死にそうなきにも、死んでしまった後にも、ぼくたち私たちが語り合うことのできるお方なのです。イエスさまを信じる人は、たとえ死んでも孤独ではないのです。死ぬ前も、死んだ後も、イエスさまがぼくたち私たちと共にいてくださるからです。なんという恵み、なんという希望でしょう！

この出来事を通して、神さまがぼくたち私たちに教えようとしておられること、二つ目は、イエスさまは悲しむ人に同情してくださるお方であるということです。今日のお話を思い出してみよう。どうしてイエスさまは、この若者を生き返らせる奇跡を行われたのでしょうか。死んでしまった若者がイエスさまに「助けて」と祈ったからでしょうか。違いますね。このお母さんか周りの誰かがイエスさまに「助けてください」とお願いしたからでしょうか。いいえ違いますね。では、どうしてイエスさまは、この若者を生き返らせられたのでしょうか。それは、イエスさまがこのお母さんを見て、心の底から可哀そうに思ったからです。「可哀そう、助けてあげたい」。そのように深く同情されたので、誰から頼まれたわけでもないのに、助けてあげたのです。

皆さんは、神さまというと、とても大きくて強くて一番高いところにいらっしゃるお方と想像するのではないのでしょうか。昔の人たちも、そのように考えていました。神さまは、ご自分は動くことなく他を動かす方、ご自分は何からも影響を受けず、他

のすべてに影響する方。そのような方であると、人々は考えていました。「神さまは、他からの影響を受けるようなちっぽけな方ではない」と言っていたのですね。ところが、イエスさまはどうでしょう。イエスさまは大いなる神の御子です。イエスさまは主です。それなのに、たった一人の人間が死に、そのお母さんが悲しんでいる姿を見て、心の底から「可哀そう」と言って同情してくださるのです。イエスさまは、ぼくたち私たち一人ひとりの悲しみに深い同情を寄せてくださるお方なのです。私たちが深い悲しみの中にあるとき、他の人は誰もその悲しみを分かってくれないかもしれません。けれども、イエスさまだけは人の心の中をすべて知っておられるので、ぼくたち私たちの悲しみもちゃんと知ってください、深い同情を寄せてくださるのです。だから、もし皆さんが悲しい経験をしたら、そのときは、その悲しみをすべて知っている方が共におられることを思い出しましょう。

とても大切なことがもう一つあります。それは、イエスさまは一度死を境として離れ離れになってしまったお母さんと子どもを再び会わせてくださるということです。死んでしまった人は、この世とは別の世界に移されてしまうので、呼びかけても答えてくれません。でも、イエスさまを救い主と信じる人は、みんな天国に入れていただき、天国でまた会うことのできるのです。天国は、私たちが救ってくださったイエスさまを中心として、神さまを礼拝する所ですが、同時に、愛する人と再び会う所でもあるのです。天国は、ぼくたち私たちが神さまとの愛の関係を喜ぶ所であると同時に、人との愛の関係を喜ぶ所なのです。

ぼくたち私たちが、自分の力では死の問題を解決することはできません。けれども、神であるイエスさまを信じる人は、必ず天国に入れていただいて、永遠に生きられるようにしていただけるのです。イエスさまご自身が命であり、ぼくたち私たちが生かしてくださるからです。ですから、この方が与えてくださる喜びの知らせを、しっかりと受け止めましょう。(小澤寿輔)

《今週の暗唱聖句》

死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。
(詩編23編4節)

7月22日

【幼稚科】

やもめの息子の復活

みんなの中で、おうちで生き物を飼っている、という子はいますか。どんな生き物を飼っているのかな。かわいい生き物を見ていると、ずっといっしょに過ごしていたい、と思うものです。でも残念ながら、途中で死んでお別れしなければいけないこともあります。死んだ生き物は声をいくらかけても目を閉じて動かないまま。その時はすごく悲しくなるのではないのでしょうか。

死んでお別れするというのは、わたしたち人間にもやってきます。生きている人とは、お話したり、一緒にあそんだりできましたが、死んでしまうとそれもできなくなってしまいます。だから、できれば死にたくない、長く生きていたい、と願うものです。

人間の場合、大人になって何十年生きてから死ぬ、ということが多いのですが、子どものうちに死んでしまう場合もあります。今日のお話では、ナインという町にあったお母さんと子ども一人という家庭で、子どもが死んでしまいました。子どもの死んだ体は棺桶に入れられ、葬式をしてお墓へと運びだされようとしていました。そこにイエス様が通りかかります。お母さんは、愛情をいっぱい注いで育てたのに子どもが死んでしまい、この地上からいなくなって

しまったこと、そのために家族が自分ひとりだけになってしまうことをとても悲しんで泣いていました。

イエス様はこれを見て、憐れに思われ、お母さんに「もう泣かなくてもいいですよ」と呼びかけられました。そして、子どもの遺体が入っている棺桶に手を伸ばしてゆかれました。そして「若者よ、あなたに言う、起きなさい」とおっしゃったのです。すると、棺桶の中の遺体が生き返り、起き上がって言葉を話し始めたのです。死んでお母さんのもとから引き離されていた子どもは、イエス様によって生き返りお母さんのもとに返されたのです。

神さまによって世界がつくられた最初のとき、人間には死に別れるということはありませんでした。でもアダムさん、エバさんが罪を犯してしまってから、人間に死が入り込んでしまいました。人が死ぬことは、人間にとっても、そして神様にとっても望ましいことではなく、悲しいことなのです。

ですから神様は、イエス様によって、人の死を打ち破ることになさいました。イエス様を信じるなら、一度死んでも、神様のみ国で復活させていただくことができます。そして一度死に別れた人とも、もう一度出会えるようにしてくださいます。

7月22日

【小学科上級・中学科】

やもめの息子の復活

1. ルカによる福音書7章11～17節を読みましょう

- ① イエスさまは母親を見てどう思われましたか。

- ② 「もう泣かなくともよい」という言葉には、どんな意味が込められていると思いますか。

- ③ イエスさまはどんな方法で若者を癒やされましたか。

- ④ この出来事を見た人々の反応はどうでしたか。

- ⑤ この話から、イエスさまはどのような方だと思いますか。